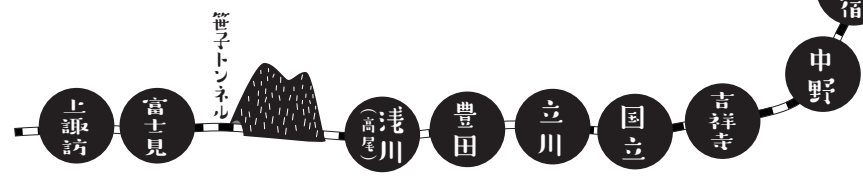




# わたくしの 中央線

## 伊藤礼



わたくしは昭和の一粒生まれである。長生きに向かつて進行中であると言えるだろう。いまわたくしは、わが人生における中央線とわたくしとの関係を回想しようとしているのだが、だからどこまで生きてきたために記憶は断片と化し、ごちゃごちゃ混ざり合っ  
て脳味噌の底部に沈殿、思い出そうとしても容易なことではないのである。思い出そうするときには沈殿物を掻き回して必要な断片を採取する作業をしなければならぬ。それでうまくゆけばいいのだが、うまくゆかないこともある。だがともかくやってみることにしよう。

さて中央線というものであるが、そもそもここにおける中央線というのは線路をさすものなのか、車輛をさすものか。それとも単なる中央線という言葉なのか、それが問題となってくるのであるが、そういう面倒なことは言わない方がいいだろう。

だがちょっと触れるのも悪くない。まず言葉であるが、中央線という言葉はわたくしが初めて耳にしたのはいつだったのだろうか。記憶のゴタゴタした堆積物の中を掻き回して探してみたら小学生のときこうい

ことがあったのを思い出した。

叔父が友人と話をしているのをそばで聞いていた時である。叔父と言ってもまだ学生であって、たいした人物でもなかった。その叔父が、東京から京都まで汽車に乗っていくとトンネルがいくつあるかというつまらぬことを友人と論じていたのをそばで聞いていたのである。そうすると友人がそのトンネルには四谷のトンネルも数えるのかと言ったのである。すると叔父があれは中央線のトンネルじゃないか、東京から京都に行くのに中央線のトンネルを数えるものかね、アハハと言ったのである。叔父は友人の知識の貧弱さを笑ったのであるが、私はそれどころではなかった。四谷というところがあって、そこにトンネルがある、そしてそのトンネルは中央線のトンネルである。それらすべて、なにも知らなかったからである。世の中にはわたくしの知らないことがたくさんあるからこれから大変だな、とわたくしは考えたのであった。たぶんこれが中央線という名前を耳にした最初である。

では次に車輛のことに移ろう。小学生のわたくしの頭のなかには、はじめのころ、もちろん、中央線車輛などというものは存在していなかった。ただ、電車と

いうものは二種類知っていた。ひとつは西武電車という路面電車で、もう一つはショーセンデンシャだった。西武電車というのは、わたくしの一家が暮らしていた杉並の和田本町から十分ほど歩いていった青梅街道を走っている路面電車だった。発車する時にチンチンと鐘を鳴らすからチンチン電車とも言っていた。わたくしの母親は新宿の伊勢丹に行くときこの電車に乗るのであった。いま西武電車と言うと、ほとんどの人は池袋から所沢の方へ向かって走っている黄色く塗った電車を考えるに違いないが、わたくしが乗っていた西武電車は名前は同じであるがそれとは違う。

西武電車は青梅街道を新宿駅から荻窪駅まで行くのであった。これは路面電車であるから屋根にポールを立てていた。ポールから電氣を取り入れて走るのであるが、線路がガタガタだから電車がすごく揺れ、揺れると簡単にポールが電線から外れるのであった。外れる時には火花が散る。夕方薄暗くなったときなど火花が綺麗だった。外れると電車が止まってしまう。そうすると運転手が降りてきてポールの綱を引っ張って電線にはめ直す。それがうまくゆかどうか眺めるのがわたくしのたのしみだったがこの電車はいまは無い。